意見書

前回会議の私の指摘について、対応をしていただいたことに感謝したい。とりわけ、(1)「ひょうごビジョン 2050」における「5 つのめざす姿」と「ひょうご経済・雇用戦略」が目指す姿の関係性、(2)KGI や KPI を用いた PDCA サイクルによる戦略の実行可能性の向上について、明確にしていただいた。

また、個別ヒアリングによる意見・提案についても、「第 1 章素案」に反映していただいた。とりわけ、「ベイエリアの土地利用」「コーディネーター」「人材の確保・育成」「雇用増の実現」に関して、重点プロジェクトの対応を確認できた。

これらを踏まえて、以下にいくつかの意見を示す。

第一に、兵庫県の経済成長を牽引する重点プロジェクトを提示されたことを評価したい。兵庫県は「とがった」地域になることが必要であり、他の地域にない特色を磨くべきである。特に GX（グリーン・トランスフォーメーション）は国も本腰を入れて推進しようとしている分野であり、水素基地立地の優位性をもつ兵庫県は、環境・エネルギー産業の先進地域を目指すべきである。今後、国からの補助金など財源調達の制度が整備されると考えられることから、その情報をいちはやくキャッチし、獲得してプロジェクトに活かす体制をとる必要がある。また、重点プロジェクトの進捗を見える化できれば、官民で同じ目標を共有して進めることができる。進捗状況の見える化の工夫をお願いしたい。「技術で勝ってビジネスで負ける」ことは避けなければならず、ビジネスにつながるイノベーションの推進を期待したい。

第二に、日本の産業の労働生産性が低く、賃金が伸び悩む理由の一つとして、労働移動が相対的に固定的であることが指摘されている。それでも徐々ではあるが、転職市場は拡大しつつあり、将来的には労働市場が流動的になってゆくと考えられる。その際、政策的に重要なのはフレキシキュリティ（flexicurity＝flexibility＋security）と呼ばれる積極的労働市場政策である。社会保障は主に国の役割なので、広域自治体である兵庫県としては、中小企業のリスキリングの支援は大切である。企業内の配置転換がスムースとなり、労働生産性の向上につながる。しかしながら、企業間・産業間の労働移動も重要であり、企業への支援に加えて個人への支援も配慮されたい。企業への支援が過度になされると、淘汰されるべき企業が淘汰されず、市場に非効率性をもたらす。AI などが人間の仕事に入りこむ現代では、「常に学習し続ける努力ができる人材」の育成が大切である。この観点からも、高等教育のあり方を考える必要がある。それとともに兵庫県においては、失敗を許容できる県民マインドを醸成し、誰もがチャレンジできる環境を整備することで、チャレンジしたい人が集まる兵庫県、「チャレンジ先進県」であることを発信してもらいたい。

第三に、「第 1 章素案」とあるので、今後に「第 2 章」以降が提示されると認識している。「第 1 章素案」は、現状把握と課題認識の記述はあるものの、政策の具体的な記述は乏しい。今後提示される「第 2 章」以降では、規制誘導、規制緩和、税制、PFI/PPP、補助金などの政策手段が提示されると期待したい。前回会議でも述べたように、政策形成コストが低いからなのか、行政は補助金による政策形成に依存しがちであるが、補助金だけが政策手段ではない。特に規制緩和は経済成長戦略において重要であり、国は PFI/PPP を強力に推進しようとしている。兵庫県の付加価値を高める最適な政策手段を選ぶべきという観点から、政策手段は幅広い検討を求めたい。

第四に、発着枠の増加と国際化が決まった神戸空港をどのように活かすのかが大きな課題として浮上したが、急遽、決まったことだからなのか、「第 1 章素案」にはほとんど記述がない。コロナ禍前、兵庫県にインバウンドをうまく引き込めなかった反省に立ち、次のインバウンドをいかに誘客するかの戦略を持つ必要がある。新しいアウトバウンドの開拓も重要である。インバウンドについては、ビジネスの構造によっては、県外企業への裨益が大きくなる可能性があり、可能な限り県内企業が裨益する仕組みを構築しなければならない。空港に関しては、観光に目が行きがちではあるが、観光以外のビジネスにつなげてゆくことも大切である。県内産業の活性化につながる展開を期待したい。なお、神戸空港が国際化すれば自動的に国際便が来るわけではない。兵庫県におけるビジネスを発展させるために、どの国・地域とつながるべきなのか、そのために、いかにしてエアラインを呼び込むのか、ターミナルビルやアクセスをどうするのか。兵庫県内の経済団体、関空会社、神戸市と連携したプロジェクトを進める必要がある。

以　上